

# 一瀬純一追悼演奏会



1979年12月8日(土) 県民会館大ホール

主催●一瀬純一追悼演奏会実行委員会 後援●山梨日日新聞社・山梨放送





第15回リサイタルより／昭和43年9月29日  
表紙デザイナー 叔 絳子

# PROGRAM

## I 部

指揮…中村 淳

- シェリトリンド……………メキシコ民謡……………ギ タ ー 合 奏  
 インドの唄……………作曲 リムスキー・コルサコフ ……"  
 夜明けのうた……………作曲 いずみたく……………(唄)  
 モ ア……………映画「世界残酷物語」より……………ギ タ ー 合 奏  
 ジャニーギター……………映画「大砂塵」より……………ギ タ ー ソ ロ  
 エル、アマネセール……………作曲 ヌエボカルテート……………重 奏  
 そよ風と私……………作曲 エルネストレクオーナ……………ギ タ ー 合 奏

山梨モダンギタークラブ ギターソロ — 瀬 映 —  
 —演奏— 弦 純 会  
 ユニークギタース (唄) 飯 野 隆 司

## II 部

- センチメント、ガウチョ……………作曲 フランシスコカナロ……………ギタークインテット  
 コメプリマ……………作曲 バオラタッカーニ……………"  
 雪の降る町を……………作曲 中田喜直……………フ ル ー ト  
 枯 葉……………作曲 コスマ……………ピ ア ノ ソ ロ  
 いそしぎ……………映画「いそしぎ」より……………(唄)  
 作曲 ジェニー・マンデル

モダンギタークインテット  
 フルーツ 秋 山 アキラ  
 —演奏— ピアノ 杉 本 一 夫  
 (唄) 渡 辺 由 佳

## III 部

指揮 飯 島 国 男

- レナータ……………H. LAVITRANO……………マンドリンオーケストラ  
 マンマ……………C.A. BIXIO……………(唄) マンドリンオーケストラ  
 野菊の如き君なりき……………編曲 佐藤克己  
 木下忠二……………マンドリンアンサンブル  
 編曲 飯島国男  
 序 曲 第四番 短調……………K. WOLKI……………マンドリンオーケストラ

—演奏— 山梨大学マンドリンクラブ 英和短大マンドリンクラブ  
 山梨モダンギタークラブ 県立女子短大マンドリンクラブ  
 山梨県ギター協会 弦 純 会  
 甲府マンドリンクラブ ユニークギタース  
 (唄) 桐 原 ふじ子 商門楽友会

# ごあいさつ

一瀬純一追悼演奏会実行委員長

## 飯島 国男

ギターに明け、ギターを愛し、ギター一すじに生きてきた人。山梨のギター発展のためにつくし、本県ギター界を今日あらしめた人、生涯をギターに捧げ、ギターに殉じた人、一瀬純一君がこの世を去って数ヶ月。

共に五線の階段を登り下りしてきた故人にゆかりの人達が集まり「追悼演奏会」を、とよびかけたところ多数の賛同を得、最後のステージ「プレクトラム・オーケストラ」に於いては実に160名という驚異的人員が集まった。これは器楽に於いて、県民会館始って以来の一大行事であり、山梨の音楽史上に例をみないことである。(ちなみに県民会館大ホールの演奏用椅子の数は100個)

思えば故人とは戦中・戦後を通じ35年、共にプレクトラム音楽普及に努力してきた。戦災一終戦一焼野原、紅梅町にボツンと残った私共の文庫蔵に同好の志が次第に集って、電灯もつかないお蔵の中に幾つかの楽器が持ち込まれ、若い連中の熱っぽい議論や演奏が繰り返えされた。

焼土に泉が湧き出す如く、ここに甲府マンドリンクラブが誕生し、やがてクラブハウスも完成、一瀬ギター教室も此処でウブ声をあげたのである。

戦後初めての放送、戦後最初の音楽会であった甲府マンドリンクラブ発表会、白木町の不二物産ビルに於ける、サロンコンサートのほしり、なにもかもが戦後の山梨音楽復興の先べんをつけたものである。そして、比留間マンドリンアンサンブルの客員として演奏会、ラジオ、レコード吹込、演奏旅行、映画音楽、テレビ出演と、あらゆる華やかな舞台において、故人と共に活躍して来たことは今はみな、懐かしい思い出となってしまった。

彼のギターは単なる名人芸だけではなかった、ソリストとしての素晴らしさは勿論だが、それにもまして伴奏者としての彼は天下に才たるものがあり、全国でも彼の右に出る者を私は知らない。実に惜しむべき人を、かけがえのない人を失った。然し、彼の死はこれが終りを告げるものではない。彼の教えを受けた人々、又彼の意志をついだ映一君を始め、多くのギタリスト達によって受けつがれてゆくものであり、今回の演奏会に於いて本来音楽会の冒頭に演奏されるべき「序曲」をあえて最後にもって来た意を、おくみとり願いたいものである。



# 追悼の言葉

## 一瀬純一君のこと

作家 深沢七郎

一瀬君が亡くなったのを知ったのは、用事で石和に帰ったときだった。葬儀もすんだあとだったし、病気のことも知らなかったから意外だった。私などは、いろいろな、いたずらのこの世の道を歩いていたけれども、彼はギターと共に生涯を甲府ですごした。だから甲府からギターの音が切れてしまったような気がしている。彼のように純粋にギターと生きたギタリストは数少ない。あの戦争が終るとすぐ、石和の私の家にきて、私とギターをひいた。甲府はまだ空襲の爪あとが生々しく瓦礫の町と道だった。フィアンセのヒトを自転車のうしろにのせて帰ったことがいまでも印象に残っている。彼を忍ぶ会が催されるので、私などはまっさきに駆けつけたい。が、この10年も私は心臓を病んでいるのでギターはほとんど弾いていないから残念だ。人の死は、惜しいとか、悲しいとか思ってもどうすることもできない。が、彼の死はギターと共に年上の私には親と子の反対の立場に置かれたような気がしてならない。

## 亡き一瀬純一氏を悼みて 比留間マンドリン研究所 比留間きぬ子

一瀬氏の訃報は御親友の一人飯島国男氏のお電話によって、もたらせられた。

「一瀬くんが！ 純ちゃんが……」と絶句された飯島氏の、ただならぬお声には私は全身を耳にして受話器を握りしめた。何故？ どうして？ とそんな言葉が頭の中を駆けめぐりのみで暫しは御悔みの言葉さへ出なかった。健康を害しておられる事は承っておったものの、つい多忙にかまけ遂に御見舞にも伺えなかった事を御遺族にも申し訳けなく思いまた現在何よりの心残りに思われる。

一瀬氏との出会いは終戦後飯島氏の御紹介で私のアンサンブル（東京）のギターパートを応援して頂いた事に始まりそれを御縁に演奏会は、もとよりNHKの放送、オーディション（飯島氏と共に）レコード録音、そして映画音楽の音入れまで御依頼しその都度、遂々甲府より馳せ参じて下さったものである。最も感銘深い一コマは数々の名画を世に送られた松竹の木下恵介監督と御令弟木下忠司氏作曲による「野菊の如き君なりき」（伊藤左千夫の野菊の墓による映画化）の音入れであった。一瀬氏の豊かなギターの音色と巧まざる中に人の心を魅了するセンサイな表現力を高く評価された木下忠司氏より直接の御指名であり一瀬氏は愛器を胸に全身全霊を傾けてあの美しくも哀しいテーマのギターソロをつとめられたのである。（因みにこの音楽はギター一瀬氏、マンドリン、比留間、マンドラ旧姓関口幸子、の三人の演奏が主体とされた）勿論木下忠司氏の期待には充分添った演奏の出来栄であったことは言うまでもない。私にも一生忘れ得ぬ思い出の一つである。

一瀬氏の死を悼みつつも斯うしてペンをとっていると今にも彼の屈託なさそうな童顔にも似た笑顔が目の前に現れそうに思える。人生の中で最も確実な事は「死」であり最もお確実なものその日時であると言う事が秘々と身に迫るのを覚えずにはいられない。御遺族をお慰め申上げると共に御愛息映一氏には亡き父上の御遺志をつぎその姿なき姿、声なき声にすがって今後ますます甲府ギター界に貢献して頂きたい、あなたの御心によって亡き父上のこの世で味あれた心の御苦しみを取り去って上げて頂きたい。拙き文ながら亡き方の御冥福を祈り上げると共に映一氏の御健康と御活躍を心こめて念じ上げ筆をおく。